

1. 巻頭言

《西南100年!》

2015年度 学生会会長 酒井 朋宏

西南学院大学は2016年創立100周年を迎えます。毎週月曜日、大学博物館講堂での神学部チャペル(礼拝)から神学部の一週間は始まりますが、この建物は学院に残る最も古い建物で1921年のものだそうです。先人たちの祈りと歴史を感じます。学院の創立者C.K. ドージャーは当初南米伝道を、また夫人のモード・バーグは中国宣教を希望していたそうです。(『C.K. ドージャーの生涯』、西南学院)しかし二人とも日本宣教に生涯を捧げることになりました。私達も自分が思い描いていたような献身の道とは違う道が示されるかもしれない。それでも自分が何をしたいかではなく、主は私たちにどのような道を進んでほしいとお望みなのかを謙虚に問いつつ、献身者としての道を歩みたいと思っています。

今年度学生会長を担うにあたり、私は年度の目標の一つに「時を同じくして神学部で共に学ぶことを喜ぶ」を掲げました。私自身がこれをどれほど実践できているのか甚だ心許ないのが現実ですが、同じ学舎に集わされた私達神学生同士がまず互いに仕え合い、愛し合うことを実践出来ればと願っています。

いつも私たち神学生のために、厚い祈りとご支援をくださる全国諸教会・伝道所の皆様に心より感謝申し上げます。

《学生会各委員会》

神学部学生会には各委員会があり、全神学生がいずれかの委員会に所属し活動をしています。各委員会の活動をご紹介します。

【対外委員会】『神学生便り』や本誌『道』の発行、神学校週間や神学生夏期研修の連絡窓口を担っています。(ご連絡は swtaigai@yahoo.co.jp までお願いします)

【チャペル委員会】神学部チャペル、神学寮チャペルの準備、企画。

【学内委員会】春の野外研修会や秋の親睦会(今年は神学寮でバーベキュー)、神学部クリスマス会など学内行事を担っています。

【学祭委員会】年一回の「西南祭」に長年神学部学生会として参加している伝統を引き継ぎ、11月の学祭期間中に公開授業やコンサートを開いています。

【被災地支援特別委員会】: 被災地を覚えての祈り、連盟ニュースレターの共有や学習会開催など、被災地を神学部で覚える活動に取り組んでいます。

目次

1. 巻頭言	1	
《神学部学生会ご紹介》	2015年度学生会会長	酒井 朋宏
2. 教員からのメッセージ（五十音順）	3	
《もう一度初めから神学を……》		天野 有
《「人材」という言葉について》		片山 寛
《Sabbath してます：オックスフォードから》		金丸 英子
《神学教育に携わる喜び》		須藤 伊知郎
《寮監として思うこと》		濱野 道雄
《ヘブライ語聖書の「道」》		日原 広志
《「ときのしるし」を見分けて生きる》		松見 俊
3. 特別投稿記事	12	
「新卒1年前の牧会研修会」開講		城 俊幸
4. 神学生紹介	14	
大学院神学研究科 博士課程後期2年		城 俊幸
大学院神学研究科 博士課程前期2年		泉 選也・河端 真理子・國分 美生
大学院神学研究科 博士課程前期1年		青木 紋子・広木 愛・福久 織江
神学専攻科神学専攻		米本 裕見子
神学部神学科4年		酒井 朋宏・三上 充・元川 信治
神学部神学科3年		伊藤 真嗣・遠藤 光子・紺田 剛孝
		酒井 信・永山 辰原・平野 健治
神学部選科3年		吉田 尚志
神学部選科2年		永松 博・宮田 祐亮・横濱 峰二子
神学部選科1年		加山 献
5. 編集後記	36	

2. 教員からのメッセージ

《もう一度初めから神学を……》

神学部教授：天野 有



今年度後期、「国内研究」ということで半年間の時間が与えられた。まことに感謝である。今現在何をしているかと言えば、一週間後に迫った或る「説教者」の集まり（丸一日）のための講演準備の最終段階に入り追われているところ。その作業は10月初めから開始したが、他方で、このためにどうしても読んでおきたいと思った研究書を8月下旬から少しずつ読み始め、最後、10月末からの2週間半は一日中そればかり読んで過ごし、なんとか読み終えることができた。それは、一人のスイス人牧師がどのようにしてキリスト教信仰に導かれ、牧師となる決心をし、ドイツの大学神学部で学び、（2年間の副牧師時代を経て）スイスの小村で牧師となり、教会内での雇用者と被雇用者間の「階級対立」を目の当たりにすることによって「初めて現実生活の現実の問題性に触れ」、その中で徐々に、「それまで当たり前のように扱ってきた」聖書そのものがいよいよ不可解なものになってゆき、遂にはパウロのローマ書に突き当たることになる……といった、一個の神学的実存の軌跡の書である（著者はプリンストン神学校の先生で英語オリジナル版は本文 467 頁。ドイツ語訳は 377 頁）。多くの大事なことをこの本から学んだ。「私が牧師だから、あなたがたに神について語るのではない。神について語らずにはおられないから、私は牧師なのだ」と言い切った25歳のこの牧師はその後10年間説教に苦闘し続け（一ゆえに、「～語らずにはおられない」とは〈生みの苦しみ〉の言い換えでもある）、ドイツの神学部招聘されてからも、ただそのためにだけその神学は形成されていた。ドイツでの最初の2年間を振り返って彼は言う。独自に聖書と神学史の研究をすればするほど、「ほぼ近代神学全体」から自分がどんどん排除されているように感じ、「お師匠さんなしにたった独り広大な原野に取り残された」ように感じた。そして、まさにその時、彼は、宗教改革者たちを「教会の教師」として重んじ、そのかれらと共に、聖書を、教会が教会として生き抜くための記録として読もうとした（宗教改革直後の）古正統主義神学の古色蒼然たる—それまでは仲間と鼻で笑っていた—教科書に出会い、そこから自分の新たな出発は始まったのだと……。まるでもう一度神学生一年目に引き戻されたかのように、この本を読んだ。そして、これからも繰り返し読み返すことになると思う。「国内研究」がゆるされたことに

よってしかありえない「出会い」だった。感謝しつつ、与えられている残された「時」を大事にしたい。(アドヴェント第一主日の夕べに)

《「人材」という言葉について》

神学部教授：片山 寛



「人材」という言葉をよく聞くようになった。大学でも、「人材育成」というような表現を平気で使う。私は以前からこの「人材」という言葉が嫌いで、人を何かの材料のように言うのは怪しからんと思ってきた。「材」とはつまり質料、素材 *materia*、*Stoff* である。人間はもちろん肉体的に言えば素材でもあるわけだが、自分は素材としての人間よりも、形相 *forma* を獲得した人間でありたい、と考えたのである。そして「人材」という言葉を聞くと、アウシュヴィッツ収容所博物館で目にした、人間の毛髪で編んだ毛布であるとか、実物は見ていないが、人間の脂肪から造られた石鹸の試作品などのおぞましいものを想像してしまうほどになっていた。

ところが最近ある先生から、人材というのは、その本義から言えば素晴らしい才智のある人物のことなのであって、仰るような悪い意味は全くない、という指摘をいただいた。なるほど大槻文彦先生の『大言海』を調べると、人材と人才は同じ意味で、「人オヲ登庸ス」などの文例を挙げている。広辞苑にも「才知ある人物、役に立つ人物」と定義してある。そういえば、「あの人は人材だなあ」と言うときの「人材」はほめ言葉であって、才幹の輝く人物への賛美を含んでいる。なるほどそうだったのか。だとすると私の考え過ぎなのだろうか。そうかもしれない。

しかしもっと考えてみると、「人材」は悪い言葉ではないとしても、この本義そのものに、能力のある人間を高く評価して、そうではない者を見下げるような、儒教的な能力主義の価値観が含まれているような気がする。「無用の用」というか、人が捨てて顧みないものに新しく価値を発見してゆくような知性のはたらきはそこにはない。世をすねて隠棲するようなタイプの間、役に立たない人間であることをよしとする人間は、「人材」とは呼ばれないのである。たしかに、他者よりもすぐれた人間を育て、優秀な能力の人間を輩出することが学校の目的の一つであるというのは、そのとおりであるのだから、「人材」を毛嫌いする必要はなにもな

い。「人材」と聞くと肌を粟を生じていたような私の連想は笑うべきものである。そうではあるけれども、「人材育成」こそが学校の目的だと言われると、そうではないように思われるのである。教育とはもっと広やかなものではないだろうか。

この頃は、Googleなどで「人材」を検索すると、先ず出て来るのは、「人材派遣会社」であり、「人材バンク」である。「素晴らしい人間」という元の意味とはずいぶん違う意味で一般には使われていると言わざるをえない。有用性 utility ということだけで判断し、人間を取り換えのきく部品として仮納入し、役に立たなければ返品するという経営者の視点から、この「人材」という言葉は多用されているのではないだろうか。「人材派遣」される派遣労働者を含む非正規労働者は、最近の調査では労働者全体の40%を超えたという。女性ではこれが60%に達する。その多くは、年収300万円以下のワーキング・プア（これも40%を超える）である。学生たちの将来とも密接にかかわるそうした現状を聞くにつけても、「人材」という言葉にはこだわりを持ち続けたいと考えるのである。

《Sabbath してます：オックスフォードから》

神学部教授：金丸 英子



出発間際まで現地住宅の入居や留守に伴う諸手続き等の雑事に忙殺され、9月25日からやっと在外研究に入りました。英語圏での生活は初めてではないためそれほど心配していませんでしたが、それは一度目が学生だったからで、今回のように一般人として住むとなると事情はまったく違いました。インターネットの接続に始まる生活環境の整備に予想以上の日数を費やすという「想定外」を経て、夫と共に今日を迎えています。

研究先はオックスフォード大学リージェントパークカレッジ (Regent's Park College, Oxford University) で、附設のアンガスライブラリー (Angus Library) には、自他ともに認める量・質共に世界最大級のバプテスト関連資料が集められています。研究者がバプテスト研究をする際、必ずここを訪れて豊富な資料にあたるのは学界の常識で、年間を通じて私のような身分の研究者が多く訪れます。私は火曜日のバプテスト史を聴講する以外はこの図書館に通いますが、街中にカレッジが点在し、オックスフォードの市そのものが大学キャンパスのようなもので、大学 ID

さえあれば数あるカレッジのどの図書館にも自由に入出入りできます。街にはカレッジの他に附属のチャペルや異なる教派のキリスト教会が軒を連ねており、そのどれもが古色蒼然とした趣を漂わせ、僧衣を纏った聖職者が普通に通りを行き交うなど、イギリス最古の大学を擁する街の、その歴史の重みを日々肌で感じています。この環境に身を置いて、時間をかけて読み、考え、必要とあらば研究者とプライベートな会話が許される日々は、文字通りの「サバティカル（安息日、Sabbathに由来）」です。予想外の物価高に緊縮財政を強いられるなど、生活は学生時代に逆戻りですが、すでに新しい発見も幾つかあり、在外終了の3月には、後ろ髪を引かれる思いでこの地を後にすることになりそうです。卒業礼拝では再びお目にかかります。

《神学教育に携わる喜び》

連盟第61回定期総会（2015年11月11日、天城山荘）

協力伝道プログラム「喜びと平和」—神学教育の現場から

神学部教授：須藤 伊知郎



いつも神学生たちのこと、そして教職員のことを覚えてお祈り、お支えくださり、心より感謝いたします。

私に与えられている時間は4分、この後、神学生が7分、私は前座です（笑）。

さて、神学とは、まず神が語る言葉に耳を傾けること、そして神について語ることです。英語でtheology、theoが「神」で、logyが「語ること」です。

教会は歴史の中で神に対する自らの信仰を常に語り直してきました。その神についての語りをその都度批判的に吟味するのが神学です。神学はその意味で教会の学です。したがってそもそも教会の支えなくして神学はありえないわけです。今この時代にあって神について語ること、神が語っておられる言葉を新たに聞き取ってゆくことが神学です。

そこで神学を学ぶ者は、自らの信仰を批判的に吟味することを求められます。それまで無意識に当たり前のこと、自明のこととしてきたことを意識して、意識化して、もう一度最初から考え直し、信じ直し、出会い直すことが求められます。そして改めて神が語っておられる言葉に耳を傾け、聞いてゆくのです。

これは非常に厳しいことです。神学生は神学部で学び始めると、自分の信仰が揺さぶられ、砕かれそうになります。私たち教員は神学生を揺さぶります。そうする

と、砕かれまいと身構えて固くなる人もいます。中には砕かれないまま、変わらないままで卒業してしまう人もいますが、大抵一旦砕かれて、それから立て直すことになります。時期は1年目、2年目、3年目、ギリギリ卒業前と様々です。卒業前だと立て直すところまで行かずに、わけが分からない状態で出てゆくことになって、大変なことになってしまうのですが…。

岩なる神に突き当たって砕かれ、立て直していただくことは実はとても幸いなことです。それは救いに至る真の躓きです。その道のりを神学生の傍で伴走しながら、共に見させていただくことは、大きな恵みです。協力伝道の大切な働きの一つである伝道者を育てることに携わらせていただくのは本当に大きな喜びです。

最後に一つお願いがございます。みなさん、どうか練られた働き人を神学校に送ってください。今後ともお祈りとご支援をよろしく願いいたします。

《寮監として思うこと》

神学部教授：濱野 道雄



西南での神学教育には3本の柱があります。一つは授業で、説教も含み、み言葉に仕える牧師の働き全ての基盤を整えます。この学びの為に神学部教員は責任をもって取り組みます。二つ目は礼拝出席している研修教会での奉仕研修で、教会形成をいかにするのか、地域教会で実習します。この主体は出身教会で、直接は神学部ではありません。勿論、福岡の諸教会の紹介は教授会でしますが、出身教会が神学生を研修教会にお願いして送り出すというのが基本です。その意味でも神学生を送り出した教会は研修教会とも連絡を取って頂ければと思います。そして福岡連合等の受け入れて下さる諸教会に心より感謝いたします。三つめは神学寮の生活で、牧会を始め、いかに人間関係を築くのかを日々学びます。学びの一環ですから、神学コースの学生は基本的に、たとえ実家が福岡にあっても入寮してもらっています。規約上、そして最終的に責任は教授会が持ちますが、極力、神学生自身の自治に任せ、お互い切磋琢磨してもらっています。

その神学寮の「寮監」を私は2年前からしています。神学生は365日、他の神学生と過ごすので、一生続く繋がりが生まれ、何かがあった時に助け合う仲間となります。ただ同時にそこでは衝突も生まれます。そこからいかに次の一歩に進めるか、

大切な学びを神学生はします。寮で起こる事は赴任した教会でも起こるでしょう。教会では表面上、直接牧師と他の教会員が衝突することは少ないかもしれませんが、同じくキリスト者が多い集まりにおいて、「水面下」では同じ現象が起こっている。教会の場合それが表面化した時、より深い傷を双方が負いやすいでしょう。私自身、神学生になった時、人との向き合い方を変えようと意識した記憶があります。それまでは教会でも「この人とは考えが合わないから、もう話しをしなくていい」としていましたが、それでは全ての人に依怙鼻屑せず関わる牧師の仕事は成り立たないと思ったからです。相手の言葉に耳を傾け、それでも言うべき事は何か考えて伝えつつ、互いに少しずつ変わる。一呼吸「譲る」瞬間が何かを変えていく。それは結構しんどい作業です。「自己犠牲」が必要と言うものではありません。批判すべき時、距離を取るべき時もあるでしょう。ただ、一回神に思いを委ね、神から見たらどうなのか考える。そのことで自己相対化すると同時に自尊心を回復する。その後で必要なら「第二の怒り」をもって、今度は冷静に事柄に立ち向かい次の一歩を考える。そんな生き方が、まさに自分自身を、同時に相手を解放するのではないかと思うのです。

神学生は今も、大切な「衝突」を繰り返しています。寮監として介入しようと思った事も何回かありました。しかしその都度、直前で神学生が自ら、解決への一歩を歩み出します。神学生に深いところで信頼し、見守りながら、共に歩ませて頂きたいと願っています。

《ヘブライ語聖書の「道」》

神学部准教授：日原 広志



本冊子のタイトル『道』にちなんで、今回はヘブライ語聖書の「道」について書くことにします。イザヤ書2章3節（新共同訳）には「道」が2回登場します。

「多くの民が来て言う。

『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を（彼の諸々のデレフから）示される。わたしたちはその道を（彼の諸々のオーラハの中を）歩もう』

と。主の教えはシオンから／御言葉はエルサレムから出る。」

ここではヘブライ語の二つの名詞デレフとオーラハが共に「道」と訳されています。両語は交換可能な名詞ですが、敢えて違いに注目するなら以下のように分けられます。

デレフは「踏み固める」「圧迫する」「達する」を意味する動詞ダーラフから派生した名詞です。明確なゴールと、そこへの到達意志が含意されており、大地を踏み固めて道なき所に道を作り出すニュアンスです。それ故デレフは途上性や、人間の関与、参与を射程に持っています。これに対して名詞オーラハは「彷徨う」「旅する」を意味する動詞アーラハから派生した名詞です。既に利用可能となっている先人の敷いてくれた道のニュアンスです。それ故オーラハは既に存在する道のいずれを利用するかについての、過去からの継承、人間の熟慮と選択を射程に持っています。3節でもデレフは「示す」という方向性と結びつき、オーラハは「(の中を)歩こう」という利用可能性と結びついています。

デレフ&オーラハは未完了&完了、主観&客観、革新&伝統として楕円の二つの焦点を成しています。オーラハはデレフの暴走危険性に対する安全装置のようにも見えます。“先人からの面倒くさい継承を遮断して、自分を初代としてリセットすれば薔薇色の理想世界を生み出せる筈だ”という高揚は、既存の思想、方法論の尊重と傾聴、継承によって是正されます。神学の道もデレフとオーラハの緊張関係にあると言えるでしょう。

イザヤ書2章3節の「主の道（デレフ&オーラハ）」は「剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。」へと向かう「主の光の中を歩」む道です（同2：4-5）。一方、終末的ヴィジョンの中で真の平和へ招くこの呼びかけ「ヤコブの家よ、・・・光の中を歩もう」（同2：5）は、イザヤの時代においては逆方向からも聞こえていました。イザヤ書30章では軍事同盟に自らの安寧と平和の保障を求めた南王国の為政者が、イザヤらに預言活動を禁じ御用預言者になるよう圧力をかけ、「道（デレフ）から離れ、行くべき道（オーラハ）をそれ／我々の前でイスラエルの聖なる方について／語ることをやめよ」（同30：11）と恫喝します。平和と真の光をめぐって、主の道と、（主の道を侮蔑する）人間の道が激しく対峙していたのが分かります。

《「ときのしるし」を見分けて生きる》

神学部教授：松見 俊



片手に「聖書」、片手に「新聞」を、とされている。聖書の言葉を具体的、歴史的文脈の中で、現代の歴史をみ言葉の視点で読むことの大切さを言ったものであろう。皆さん、神学生、特に、寮生活をしている学生たちは、どうであろうか？ そういう私は、日々刻々、悪くなる一方の政治状況に直面して「新聞」を読むと、うつ病になりそうでもあり、神学部の仕事が多忙で最近では全くというほど新聞を読まない。意外と、神学生たちも勉学と教会奉仕、そして寮の個室という現状の中で、同じような状況ではないかと思う。しかし、信仰者は、「ときのしるし」を見分けながら神学せねばならないだろう。

今年は安保関連法案が成立してしまった年である。大学の教員たちの反対署名に加わり、また、街頭デモにも5、6回参加した。福岡のゴスペルを歌う会、2・11集会、8・15集会従来のデモに加えて、街頭に出る回数も増えてきた。

今年はまた、「明治日本の産業革命遺産」が「世界文化遺産」に登録された年でもある。どうも胡散臭い。その胡散臭さをここに記録しておこう。

数年前、友人夫妻とオーストリアのザルツブルクで待ち合わせをし、レンタカーのベンツを運転して有名な世界遺産のハルシュタットを訪問した。驚いたことに湖の美しさと岩塩鉱で名高いハルシュタットの古民家は「世界遺産反対」の垂れ幕で満ちていた。わが国で言えば、「近隣高層マンション反対」というような雑然とした雰囲気であったが、世界遺産に登録されると観光客が殺到し、自然破壊が生じ、古い静かな村の生活が脅かされるからであろう。世界遺産反対という運動があることに驚いた。

さて、話は「明治日本の産業革命遺産」のことである。この中には吉田松陰の「松下村塾」が含まれている。なぜ、松下村塾が「明治日本の産業革命」と結びつくのであろうか？！ 今回の登録運動は当初、長崎のキリスト教教会群が登録申請を行おうとしたが、政府というか行政の横やりで、「明治日本の産業革命遺産」の申請となったというニュース記事を目にしていた。そして、NHK大河ドラマの「花燃ゆ」である。安倍政権は、70年前の敗戦経験をすっ飛ばして、「明治維新」の「富国強兵・脱亜入欧」策に戻ることを目指している。つまり、テロリズムから始まった明治クーデター（勝てば「官軍」の天皇の政治利用を画策した長州の企み）

へ戻るといふ野望である。つまり、佐藤栄作、戦争犯罪人である岸信介、そして、明治「維新」以来の長州政治支配の世界的「正当化」こそが、安倍さんの狙いなのだ。「明治日本の産業革命遺産」で盛り上がる九州の人たちを笑うつもりはない。しかし、このような胡散臭いナショナリズムはやはり警戒すべきである。テレビも、日本と日本文化礼賛番組がいやに目につく。(その裏には経済格差で喘いでいる若者たちによる韓国人・中国人へのヘイトスピーチ)そして、2020年の東京オリンピックである。いやいや、鬱陶しい社会風潮である。「ときのしるし」を見極めて生きる者でありたい。

3. 特別投稿記事

《「新卒1年前・牧会研修会」開講》

博士後期課程2年：城 俊幸

毎年、3月に、4月から新たに赴任する牧師のための「新卒研修会」が連盟事務所にて行われる。私も12年前、その場にいた。その時感じたことは、「赴任1ヶ月前では遅すぎる！」だった。そこで、12年の牧会経験と2度目の神学生という立場を活かして、神学生に最後の1年を有効に学んでもらいたいと思い、「新卒1年前・牧会研修会」を企画した。在学中に「何を・どこまで・どのくらい・どのように修得しておけばいいのか」を理解してもらおうと思った。1回2時間半で全9回、10名程度の参加。学問にならない牧会経験・牧会術の「口伝伝承」を文章化し、整理して教えた。

講義内容

1回目「最終学年の心構え」

「3年以内で潰れる人」の傾向と対策

招聘とは・心構え・自分の教会像作り（道・神学部報へ）

*宿題1：修了論文の準備（概要・目次・結論・文献10冊以上持参）

2回目「修了論文」

修了論文概要確認（概要・目次・結論・関連文献）

*宿題2：自分の式文ファイル作り・葬儀準備マニュアル打ち出し

3回目「式文の学び1、葬儀」

葬儀式文・準備マニュアル・資料収集（葬儀社・火葬場・規模・場所）

流れ：打ち合わせ→納棺式→葬儀（前夜・告別）→火葬前式→納骨式へ

装備：式文・ガウン・葬儀BGM用CD・アンプ・奏楽者

葬儀準備関連ファイルの確認

*宿題3：結婚カウンセリングのカリキュラム・結婚式マニュアル打出

4回目「式文の学び2、結婚式」

結婚式式文・準備マニュアル・結婚カウンセリングの内容

*宿題4：アシュラム2回→メッセージ根幹作り

5回目「説教術1」

説教つくりのためのアシュラム（霊想）：やり方の説明・2回実施

*宿題5：アシュラムからのメッセージ作り、メモまでを3本

6回目「説教術2」

説教術・説教作りのポイントとコツ・手順・参考本・資料収集方法

*宿題6：ギリシア語の暗記項目の確認・暗記

7回目「聖書を読むためのギリシア語」(ギリシア語中級)

文法・必須暗記項目・読解方法・辞書の活用方法

*宿題7：バプテスト？バプテスマ？献金？主の晩餐とは？

8回目「バプテスト教会についての知識」

バプテスト史・献金・晩餐式・バプテスマクラスのカリキュラム

*宿題8：「年間スケジュール表」「奉仕一覧表・教会組織図」作成

9回目「牧会全般・牧会心理学」

牧会・教会運営・教会堂管理・リーダーシップ

牧会心理学：信仰と心理的依存の区別・具体的な症例と対処方法

*宿題9：心理的病理のまとめ(症状と対応)

4. 神学生紹介

牧師に「ならされる」恵み

西戸崎キリスト教会牧師
大学院博士後期課程2年 城 俊幸



2012年4月、多くの人の反対を押し切り、西南学院大学神学部大学院に再入学。その前年はとてもハードだった。戸塚教会の皆さんにも、自分の家族にも辛い思いをさせてしまった。それでも、やらなければという思いだった。8年間の牧会のうちに何度か促しがあったが、その都度あきらめていた。慣れた教会、戸塚の町並み、会員一人一人との絆を切りたくなかった。しかし、7年目から、抑えがたくなり、8年目は「後がない」という気持ちに駆られた。青野先生の退官間近と聞き、先生がおられるうちに西南に戻りたいと、祈り始めた。

福岡では、全てを捨てての始まりだと決意して、もう牧師に戻れないかもしれない、と心配していたが、学びの傍ら、9月から西戸崎キリスト教会の臨時牧師に「ならされる」。

そのいきさつは、6月に西戸崎教会に神学校週間で訪問。その際、北芳生牧師から「自分は今年度で引退するので、来年度から西戸崎を手伝って欲しい」という申し出。神学校での研究と両立が許されるのなら、不可能ではありませんと返答。ところが、翌月、体調不良により、先生は8月に辞任なさることに。6月の時点でも、かなりご無理をされていたのだと知り反省。北牧師はどうしても私に後を頼みたいと言い、辞任なされ、故郷金沢に帰られた。こうして、急遽9月1日から再び牧師に「ならされる」。

西戸崎教会は、会員35名、礼拝出席平均35名の教会です。土日だけ、5LDKの牧師館に1人で宿泊。毎週、海辺の別荘に来ている感覚。学校から1時間半、山を見て海を見ながら、週2回通う。水曜日は夜の祈り会に参加。電車の中で読書ができるので、快適。「教会に通う」という感覚も、大切だと思った。西戸崎は、海の中道・海浜公園で有名なところ。だが、陸の孤島でもある。駅から、教会まで、10分間歩いても、ほとんど人に出会わない。コンビニも町外れに1店。7時になると真っ暗。まさに空と海だけ。

しかし、それゆえに、信仰の継承が実現している。親子三代、四代の家族がおられ、64年前の初代教会員が現役。都会ではありえない。そのような信仰の先達に囲まれて、私自身の信仰も安定したように思う。

博多港から渡船に揺られ、どこかの島に宣教に来たような新たな気持ちにされる。こうして、神様の導きと促しに感謝を覚え、牧師に「ならされる」恵みを全身で味わう。

《おいちゃん》

研修教会：西戸崎教会 推薦教会：野方教会

大学院博士前期課程2年 泉 選也



11月3日、叔父が出先で倒れたという知らせが飛び込んできました。ちょうどその日はお休みだったので、叔父は佐賀まで温泉に出かけており、そこで服を脱いだ際に、大動脈解離が起こってしまいました。救急隊員の判断によりドクターヘリを要請。すぐさま病院に搬送されました。家族が病院にかけつけ、緊急手術が終わるのを待っていました。私は、というと病院夜勤のアルバイトがあり、叔父の元に行くことは叶いませんでした。そして仕事を終え、病院に向かいました。手術は無事に成功しましたが、まだ覚醒させられない状態にあるとして眠ったままの面会でした。元気だった頃からは想像も出来ない姿に変わり果て、たくさんの管につながれ、胸には痛々しい手術跡が残っていました。なぜか私の方が泣きそうになりました。翌日目が覚めたので、また会いに行きました。「おいちゃん！」と呼びかけましたが、まだ意識もぼんやりとしていて声は出せないようでした。神学生になってからは二人きりの時でも「牧師」と呼んでいましたが、久しぶりに「おいちゃん」という言葉が出てきました。

話は変わって、その時の私は四月からの赴任に関して大きな迷いの中にありました。毎日のように叔父に報告と相談をしていました。しかし「このような事態になってしまった今、一体誰に聞けばいいのか」と混乱が深まる中、急病に倒れている叔父の姿が不思議にも決断する勇気を私に与えてくれました、「いやだからこそ自分がしっかりしなくてはいけない」と。叔父はいつまでも牧師でいてくれるわけじゃない。当然「牧師」という呼び名がまた「おいちゃん」に戻る時がやって来る。というか変な話、今度は逆に自分が牧師になってしまう。こんなに恐ろしいことはない。でも招聘してくださった教会も、秋に特伝講師として招いてくださった教会も、その恐れとリスクを顧みず、敢えて選んでくれました。何もない自分、持たざる者である私を神が用いようとしていることを知ることができたのは、そのような教会の決断を通してでした。そして私が決断できたのも、恐れと混乱の中でした。今回、そういうところにこそ働く神の力があることを教えられたような気がしています。数日後また面会に行きました。叔父は開口一番「あれはどうなった？」と。意識を失ってもちゃんと覚えているのだと少し感動しながら、「もう返事したよ」と言うと驚いた顔をしておりました。

《感謝を込めて》

研修教会：福岡新生キリスト教会 推薦教会：福岡新生キリスト教会
大学院博士前期課程2年 河端 真理子



「わたしたちは時々、良い人に見られようとして、とっさに小さな言動を企ててしまうのよね。でもそれは、自分を守ろうとしているのよね。」この言葉は、昨年元宣教師の先生にかけていただいた言葉です。自分が感じていることや考えていることを話したわけでもないのに、数日間の私の言動を見て、私のいろいろな問題に対する急所を一言で突いて下さいました。それは、私を戒める言葉であると同時に、「慈しみ」(フィリピ2:1)から出た言葉でした。その一言で緊張の糸が切れ、ヤマアラシのとげもどこかにいってしまいました。

思い返してみると、大学の中で先生方や友人から、教会の中で先生方や教会員の皆さんから、そしていろいろなところで出会った方々からこのような言葉をかけていただきました。口当たりのよい言葉であっても結果的には厳しい言葉であったり、厳しい言葉であっても結果的には励まし立たせる言葉でした。押しつけるわけでもなく、背後に祈りのある言葉をたくさんいただきました。また時に、差出人の名前のない読みものが教会のボックスの中に入っていたり、御言葉のみを書いたカードを笑顔で手渡して下さったり、行いという無言の言葉をもってあらわして下さいました。4年間に受けたそれらの出来事は、この紙面上で語り尽くすことは出来ません。にも関わらず、私がお返ししたものは時に善意とは言い難いものでした。これからどのようになるとも分からない1人の献身者のために、祈りと有形無形の支え、捧げものをして下さった連盟諸教会をはじめとする多くの方々に感謝申し上げます。また、4年間導いて下さった主に心から感謝致します。

来年度からは、さらに現場で訓練を受けながら準備の時をもつ予定です。未知の部分が数多くありますが、だからこそ、主との関係を深められながら、いろいろな人に出会って、変えられていくことを期待しています。そして、主から恵みをいただいて、御言葉を通してはもちろんのこと、私がいただいたたくさんの言葉を私自身も発していける人になっていきたいと願っています。

《4年目、原点回帰の年》

研修教会：鳥栖キリスト教会 推薦教会：市川八幡キリスト教会

大学院博士前期課程2年：國分 美生



ふざけている、とお叱りを受けるかもしれないが、本人は至って真剣なのでここで打ち明けさせていただく。神学部に入學が決まった4年前のある時点からしばらくの間、頭の中をひっきりなしに「ドナドナ」が流れていた。生まれ育った場所から、神学部という「市場」に連れていかれ、教会という「農家」または「精肉工場」に送り出される…そんなイメージを抱いてオドオドしていたかもしれない。「さあ、やるぞ」と鼻息荒く入學したのではなかった。本意でもあり不本意でもあるような…つまり、自分の決断を超えて「どうしてもここに向かうより他はないように思う」という確信、自分の好きに生きることへの諦め、これからどこに運ばれるのだろうかという不安が入り混じっていた。たった4年で自分の何かが変わるというのだろうか、と懐疑的でもあった。

神学部は寮生活も含め、確かに訓練や練習の場でもあるが、入學前想像していたような「習い、身につける」こととは別物だった。見る、知る、出会う、思索する、引っかかることを神学化する。それらすべてが学びであった。これまで世の不条理や不正義に対し腹を立て、自分なりにアクションしてきたが、「人は誰しも人間らしい人生を生きる権利がある」との思いに神学的意義がきちんと与えられたのもホッとすることであった。やはり神が、一人一人を尊厳ある大切な者として創られたのだと。とりわけ何を学び得たか、一言に集約するなら「キリストの希望の確かさに信頼すること」と言える。キリストの和解と平和の福音に仕え続けたいとの思いを、机上の学びで、また実践の場で何度も新たにした。そしてまた、自分が教会共同体をとっても好きであるという新たな気付きがあった。教会は趣味も性格も、ありとあらゆるものが違う人々が集まっているが、ただ一つキリストの希望において、バラバラでありつつも一つにされている。そして、宣べ伝えていくために私たちは癒され、立ち上がらされていく。それらのユニークさゆえ、教会は面白いと心底思う。

卒業の餞か駄目押しか、主は私にパートナーという同志を与えた。これまでも多くの出会いの中で感じてきたことであるが、祈りと信頼によって人は、自分が持っていると思う以上の力を発揮できるものなのだ、今強く実感している。

感謝と希望を込めて。

《良き牧者》

研修教会：姪浜バプテスト教会 推薦教会：南光台キリスト教会

大学院博士前期課程1年：青木 紋子



大学院での1年めの学びの時が与えられました。祈り支えてくださっている方々への感謝にたえません。大学院では「教会と国家」のテーマに取り組んでいます。今の時代と重なる部分が多く、学ぶべきことがたくさんあるな、と強く思われています。

さて今年の11月。祖父が危篤だということで、急遽実家に帰らせていただきました。多くの方々に祈り支えていただきましたこと、感謝申し上げます。

実家に帰ると、体調を崩した母と、疲労困憊した父がおり、そして、ちいさくなってベッドで苦しそうな祖父がいました。最期を一緒に過ごそうと、ずっと手を握り続けました。本当に可愛がってくれた祖父でした。祖父は、私だと判ると、目に涙を浮かべ、手を握り返してくれました。「おじいちゃん、今までありがとうね。遠くにいっちゃってごめんね。」と、伝えることができました。

祖父の最期を共に、との思いでした、祖父は不思議とお医者さんに「もう大丈夫だろう」と言われるところまで回復しました。以後、介護の日々となりました。介護は大変でした。しかし、これまでお世話になった祖父に、ほんの少しでも恩返しできたかな、と思います。祖父の今後の方針や入院先が決まり、私も福岡に戻りました。大変な中でしたが、父に「福岡に戻れ」と送り出されました。実家での滞在は、過ぎてみれば1週間ほどでありました。今は落ち着き、これからは福岡でできる支えをしていきたいと思います。

さて、祖父のことで思い出した話があります。祖父は昔、食肉用の牛を育てており、良い牛（おいしい牛？）を育てたということで、全国の品評会で表彰されたことがあります。そのことが祖父の自慢でした。小学生の頃、「おじいちゃん、どうやったらそんなにいい牛を育てられるの？」と聞いたことがあります。その時の答えが忘れられません。祖父の答えは、「よく撫でてあげた」というものでした。「へえ～」と、当時は思っただけでありました。

この、「よく撫でてあげた」という祖父と、「良い羊飼いである」（ヨハネ 10：11）と言われたイエス様が重なります。私のイエス様のイメージは、祖父に影響されているのかもしれませんが、もちろんイエス様は、「おいしく食べるため」ではなく、むしろ命を捨てられたのですが。

《命の息を吹き入れられた人間と教育》

研修教会：久留米荒木キリスト教会 推薦教会：田隈バプテスト教会

大学院博士課程前期1年：広木 愛



ずっと磨くだけで終わっていた相棒のサクスをひっぱりだして、寮の音楽室で練習するようになりました。楽器に息を吹き入れると、自分の感情が豊かになるように感じます。研修教会の久留米荒木で、福岡の汚れた空気を気にせず深呼吸すると、一週間の疲れが飛んでいきます。

大学院のキリスト教教育学の授業で、創世記 2:7 から、土のちり、土の器として神さまから「命の息」を吹き入れられた「人間」観と学校教育について学びました。ミッションスクールで長年、生徒たちと一緒に聖書を読み続けてこられた山田光道先生（元西南女学院中学・高校の先生）の歩みのすべてが詰まった授業です。学校現場で生徒たちと一人の人格として向き合ってきた先生の教育の姿は、教会教育にも通じたいせつな姿勢であることを学んでいます。

これまで、教会の中では喜怒哀楽の内、「喜」と「楽」は、良い賜物、残り二つは不信仰の賜物のように思い込んでいましたが、キリスト教教育学者のキャロル・ヘスは、「喜」と「楽」だけでは不健康な状態であるというのです。キリスト者だから、女性だからと「怒り」を抑えることは、人の成長・教会（社会）の成長を妨害するというのです。神さまの望んでおられる教育のあり方は、感情を抑えることではなく、感情を豊かにすることだと理解しました。一部の人が感情豊かにのびのびすることではなく、その共同体の人たち、みんなが感情豊かになることにつながるのかもしれないと考えるようになりました。

神さまが息を吹き入れてくださったときから、私たちの「学ぶ」歩みは始まっています。学校は「学び」終わり、卒業がありますが、教会には、卒業はありません。日々、神さまからの「まなび」が与えられていることを思います。ほかの人と一緒に聖書をまなぶとき、自分と違う価値観や考え方と出会います。そのとき、教育者なる神さまは、他者ではなく、「自分自身」のあり方を教えて下さるのだと思います。その出会いは、自分と出会い、人と出会い、イエスさまとであり、神さまとの出会いであり、この出会いが教育に結びついていくことで、神さまが教師の教育が成り立つのかもしれないと漠然と考えている毎日です。

学びの 때가、神さまに赦され、全国のみなさま、母教会、研修教会のお祈りとお支え、そして交わりの中で守られていることを心から感謝します。

《神学部 裏カリキュラム》

研修教会：バプテスト野方キリスト教会 推薦教会：函館キリスト教会
大学院博士課程前期1年：福久 織江



神学部裏カリキュラム、この言葉をご存知だろうか。神学部の某教授が使われる言葉だが、これは決して学生が隠れて怪しい学びをするのでも、人間社会の裏の裏を辿るのでもない。それは神学部の正規カリキュラムとは別に、神学生の人生すべての領域において働く、神の取り扱いを指す言葉である。信仰の偏りや聖書理解の浅薄さ、自己絶対化への願望や自己尊厳の脆弱さ、人間関係のあり方の諸問題、ひいては親子関係に至る迄、間断なく次から次へと神によって暴かれ取り扱われる。これがまさに、師曰くところの裏カリキュラムなのだ。

私の場合、高慢の鼻をへし折られ、自己実現的な信仰を砕かれ、握り締めているものを手放し神の主権の前にひれ伏さざるをえない、そんな神の厳しい取り扱いが入学後1～2年間続いた。神学部3年目の今年度は、どんなしんどい作業が待っているかと覚悟して臨んだが、意外なことに今年私に訪れたのは、自己受容への招きであった。それは、出来ることなら巻き戻してやり直したい悔いだらけの人生と、持病で基礎体力が落ちてしまった自分を、赦してあげることであった。そしてそれはイエスの赦しを受け取りなおす作業であり、もう一度十字架を見上げることであった。

するとなぜか、自分が死ぬべき存在として創られている人間であることを痛感するようになった。そして、天の御国だけを待ち望む一種の逃避的信仰から、今生きる世にあって自分の与えられた生を生きる、現実を見つめる信仰へと変えられたのである。すると不思議なことに、人間のみならず命あるものが全て愛おしく感じるようになった。そしてそればかりか、イエスがこの地上で生きたその生き様が、弟子たちや原始教会の喜びや苦悩や戸惑いが、現在進行形で聞こえてきたのだ。そして結果的に、教会像と牧師像を改めて考えざるを得なくなった。赦された者として生きる、そして赦された者と共に生き合うとはどういうことなのか・・・と。

神学部での学びは、本当に不思議だ。正規のカリキュラムも裏カリキュラムも、全てが神の慈愛と峻厳さに満ちている。そして神学生は、教会現場に出るために必要な練り直しを何度も受け、主に仕えるものとして準備されていくのである。卒業の時点で、私たちが牧会者として完成品になるのではない、牧会者となるための下ごしらえがなされる、それが神学部なのだと感じている。このような素晴らしい環境で学べる幸いと、皆様のご加禱とご支援に篤く感謝している。福岡より、皆様に心から御礼申し上げます！！

《海の道》

研修教会：平尾バプテスト教会 推薦教会：南名古屋キリスト教会

神学専攻科神学専攻：米本 裕見子



自転車で室見川を走る楽しみを今年の「道」でご紹介して一年。最近、新たに密かな楽しみを見つけた。寮から海に出る道だ。海岸沿いを走れば学校へも行ける。早良口交差点そばの焼肉屋の脇道、川沿いを下ればすぐに広い河口に出てワーっと海が広がる—ここが気持ちいい。左手に糸島、その前も島。大小の船。右手後にはヤフードーム、福岡タワー、ヒルトン。振り返れば山々。きらきら光る水面、潮の香り、波の音。自転車を止めて砂浜を歩く。背伸びして、深呼吸。水鳥たちがゆらゆら。鶉が時折ぐいっと潜る。小さな魚の群れが泳ぐ。向こうでボラがジャンプ！思わず「飛んだ」と小さく叫ぶ。釣り人たちが糸を垂れる。1人のおじさんが携帯でとっておきの一枚「朝焼け」をご披露して下さい。時間があれば聖書を開き、海を眺めながら讚美、祈り— これまでの2年半でここに来たのは3回だけだった。10月初旬、行き詰まって海に来た。その帰りに海と寮を結ぶ道を発見。「いつでも海においで」と言われたようだった。神様の癒しのプレゼント—「主のなさることは時にかなって美しい」。

主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息(聖霊)を吹き入れられた。人はこうして生きる者(いのち)となった。(創2:7-8) 大自然の前に立ち、喉に詰まった物を吐き出し新鮮な空気を体中に吸込む。神の息吹に生かされていることを実感する。こんな贅沢な神との交わりの時を持ち続けたい。大海原でいつも主が照らして下さる一筋の「道」を見失わないように、主から目を離さず主と、神の愛する人々と共に、これからも与えられた道を、顔を上げて生きていこう。

ご挨拶：三年間の学びが守られてきました。沢山のお祈りとお支えを本当にありがとうございました。新年度からバプテスト女性連合での新たな道が、与えられます。心から感謝します。ひき続きお祈りに覚えて頂ければ幸いです。女性連合の機関紙「世の光」、国外伝道、後継者育成、沖縄、被災地支援他…、一つ一つ教えて頂きながら取り組んで参ります。バプテストの群れにある私たちが、共に主にあって連帯し、益々生き生きとした信仰・教会生活を歩んでいけますように。また、神からの召しを受け、日々格闘し走り続ける友ら、ご指導下さる先生方、寮母さんご夫妻、神学校を覚え皆様とご一緒に祈りを合わせていきたいと願っています。今後ともどうぞ宜しくお願いします。栄光在主。

《二年目の学び》

研修教会：鳥飼バプテスト教会
推薦教会：日本バプテスト名古屋キリスト教会
神学部神学科4年：酒井 朋宏



「神学部での学びはいかがですか？」こう聞かれる度に即答できない時期が入学以来しばらく続きました。神学とは自分の信仰を説明することと理解していますが、神学書を読むたびに「こんな難解な言葉や表現を使わないと信仰は説明できないのか」と考え込みます。しかし、聖書の御言葉を自らの言葉を通して人に伝えていく牧者となるために必要な学びの過程が今であると信じ、母教会、研修教会、全国諸教会・伝道所の皆様の祈りと支援に頼み感謝しつつ二年目の学びの日々を送っています。

昨年に引き続き、今年も鳥飼バプテスト教会で研修・奉仕をさせて頂いています。2～3ヶ月に1度主日礼拝説教、または水曜日祈祷会の奨励メッセージを担当させて頂いています。20代のころから母教会でも担っていたCS教師、鳥飼教会でも小学科を担当しています。今や自分のこどもが二人とも(小5の長男と小3の長女)小学科のクラスメンバーです。長男は今年6月、バプテスマの恵みに与ることができました。

今年の3月には妻の家族が通っている韓国スウォン市近郊にある教会「ハナ教会」(<http://www.hanachurch.net/>)から、自身の救いと日本のキリスト教の状況について話して欲しいと依頼され、礼拝の中で証し兼説教をする機会も与えられました。私の韓国語は不十分ですが、韓国出身の妻に事前に翻訳してもらった原稿を元にして何とか30分弱話し通すことができました。日韓のキリスト者同士の交流の小さな働きとしても用いて頂けたかと思っております。

今年度は神学部学生会長も担っています。神学生はそれぞれ学生会の中の各委員会で自主的な働きをしていますので、会長の務めは諸活動のサポート役です。時を同じくして西南神学部に集わされたことを共に喜び、励まし合えるようになればと願っています。また学生会「被災地支援特別委員会」の委員長も兼任し、神学寮での毎月11日の「被災地を覚える祈り会」や学習会等に他のメンバーと協力して取り組んでいます。

2年目にして早くも取り組む学部卒業論文では主の「復活」に聖書学から取り組んでいます。ヨハネ福音書20章の主の復活顕現記事から、復活の主を見て喜んだ弟子たちと、“見て触らなければ決して信じない”と言ったトマスの姿を比較し、「見る」信仰とは何か、「見ない」信仰とは何か、そして主の復活がなぜ私たちの救いであるのかを追及し、牧師として復活の救いをどのように伝えていくことができるかを問うていきたいと思っています。

《しかし、それでも》

研修教会：自由ヶ丘キリスト教会 推薦教会：金沢キリスト教会

神学部神学科4年：三上 充



敗戦後70年を迎えた今年の日本は、「戦争」に急速に近づいた。自衛隊の外国での戦争参加を可能とする「国際平和支援法」と、10の法律の改正を含んだ、いわゆる「安全保障関連法」(以下「安保関連法」)が成立してしまった。私は、安保関連法に反対である。もちろん、安保関連法に賛成の方々のほとんどは、それが戦争を抑止し、平和を構築するために資するという思いをもって賛成しているのだろう。私は「平和のために抑止力が必要」という論理は理解できる。また私は中国が年々軍備を増強していて、南シナ海に人工島の軍事基地を建設していて、明らかに領土的野心を持っているとも考えている(だからといって、それがすぐに戦争につながるわけでもないとも考えている)。

しかしそれでも、私は安保関連法に反対である。何故なら、私は武力によらない平和の構築を目指しているからである。そして武力によらない平和とは、イエス様が目指していた平和だと理解している。「理想論」と批判する者もいるだろうし、実際に「理想論」の側面を含んでいるのだろう。しかしそれでも、20世紀の歴史を見れば、軍事力によって戦争を抑止するあり方、勢力均衡といったあり方が、結局は大きな戦争を引き起こしてきたのも事実であり、「軍事力を用いた抑止力による平和維持」なども結局は「理想論」に過ぎないのである。軍事力に頼らないのも頼るのも、どちらも「理想論」の側面があるのだ。であるならば、私は、イエス様が目指した、そして実際に生き抜いた、「武力によらない平和」を目指していきたい。そちらの方が、より「現実的」な平和構築のやり方だと考えるのだ。

もちろん、歴史上キリスト教こそが最も戦争をしてきた宗教であり、現代においてもなお、「十字軍」と称して他国を攻撃する「キリスト教国」があることを忘れてはいけないし、私は「そのようなキリスト教と自分は違う!」とは思わない。私の信仰は間違いなく、キリスト教の戦争の歴史をも受け継いでいて、今なお「十字軍」的な発想を真摯な信仰ゆえに持っている方々とのつながりの中にある。

しかしそれでも、今、私は、イエス様が目指した平和を目指し、そのために行動したい。その試みは、もしかしたら大失敗、大挫折に終わるのかもしれない。しかし、それでもいい。イエス様が生き抜かれたあり方だ。私たちはそのあり方に希望を見出している、信じている。私は、そう考えている。

《Come, Follow Me!》

研修教会：福岡バプテスト教会 推薦教会：調布バプテスト教会

神学部神学科4年：元川 信治



イエスは、弟子を招く際に、「わたしについて来なさい。」と呼びかけている(マタイ 4:19)。現代を生きるキリスト者に対して、この言葉はどのように語りかけるのだろうか。あるいは、“キリスト者として生きる”ということは、単に“あなたの罪は赦された”(ルカ 7:48)という告知を受け取る以上のことを指すのだろうか。

神の義を自己肯定の方便として用いるとき、その信憑性に不安を覚えることで後退することはあっても、先に進むことは一步もできないであろう。また、罪の赦しが、人生のリセットボタンでしかないとしたら、繰り返されるループの中に絶望するしかない。“キリストについて行く”、これこそが私たちの歩みを進めさせてくれる。

今日、日本社会において、貧困は海の向こうではなく、実に傍らにある。OECDが今年出したデータ*によると、日本における相対的貧困率は16.0%、34カ国中、29位であった。この値は、国民所得中央値の半分以下(2011年の中央値は432万円)の所得しか得られていない世帯が占める割合を示している。簡潔に言うならば、貧富の差が拡大していることを端的に示す値である。さらに、現役世代の大人が一人で子どもを養っている世帯の場合、相対貧困率は50.8%、この数値は最下位にあたる。社会的に弱い立場にある存在が、困窮のままに捨て置かれるという、貧困を構造的に作り出す社会に私たちは生きている。

わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。(ヨハネ 12:26)

主は、今日、どこにおられるだろうか。キリストの業に与る者とされる、これこそが、本当の祝福、喜び。天に名前が書かれているか(ルカ 10:20)に気をもむのではなく、既にその恵みを受けた者として、どのように生きていけるか。主がおられるところ、そこが私たちの働き場。どうか、神ご自身が、私たちの内に働いて、望みを起こさせてくださいますように。主が、私たちを遣わし、“よこしまな曲がった時代の中”で、まことの光(ヨハネ 1:9)を映す器としてくださいますように。

*OECD (2014) Family database “Child poverty”による。

《新しい出会い—共に生きる》

研修教会：古賀バプテスト教会 推薦教会：相模中央キリスト教会

神学部神学科3年：伊藤 真嗣



西南学院大学神学部での学びをいつも支えて頂き、心から感謝致します。私にとって前期は新しいチャレンジの連続でした。最初はギリシャ語や神学など久しぶりに学問と向かい合い、全寮制という生活にも戸惑いましたが、次第に慣れ、今は信仰的にもそれを受け取る大事な時間だったと思っています。そして研修教会の古賀教会では、奉仕や教会の共同体形成を学ぶ中で、よき交わりや、バプテストのあり方について考える訓練を受けています。そのような問いを持ち続け、教会形成は1人1人が神さまに委ね共に御心を求め続ける、対話するプロセスが重要だと知りました。今年度は私としては初めて、8月の全国壮年大会と11月の連盟総会に参加させて頂きました。バプテストの中でも大きな大会である2つに参加させて頂き、1つ1つの大切な議題を吟味し、バプテストらしい白熱した議論の場になったと思います。特に連盟総会では、アルバイトとして、神学生同士が協力して議事運営のご奉仕をさせて頂いたことはよい学びの機会となりました。

9月、神学部被災地支援ボランティアとして、西南大学一般学生10人と共に岩手県大槌町に行ったことは大きな経験となりました。岩手県大槌町小槌にある「大槌第8仮設住宅」と「小槌第4仮設住宅」に住む方々と交わりの時を持たせて頂きました。私は2年前にもバプテストのサポートチームで岩手県の被災地に行くのは2回目ですが、復興が進んだことと全く変わらない現状に唖然とし、現地の人々の格差を感じ、より一層目に見えないものに目を注ぐ必要があると感じました。特に仮設の方の、津波の状況や亡くされた家族のことを話すときの表情は変わらず沈んだままでした。しかし最後に「また来てね」「忘れないで」と言われたことが私の記憶に焼き付いて離れません。これからいつも東北の皆さんのことを覚え祈り続け、自分に何が出来るか、キリスト者として何を伝えるべきか考えていきたいと思っています。「神に望みをおく生きる者は新たな力を得る」(イザヤ書40章27節～31節)私のような未熟な器の者でも、主は用いてくださり、献身者として活かして下さいます。これからも、キリストに倣うような誠実さをもって、日々神学の学びを続けていきたいと思っています。私の弱さや破れをいつも突きつけられていますが、今本当に受け止める優しさと強さを養う訓練の時なのだ実感しています。最後に全国諸教会の皆様の祈りと支えに感謝しつつ、これからも、主に用いられ、主の助け、癒しと新たな力が与えられるようにお祈りに覚えて頂ければ幸いです。

《主に拾われ 主に養われる》

研修教会：筑紫野二日市キリスト教会 推薦教会：別府国際教会
神学部神学科3年：遠藤 光子



主のみ名を賛美いたします。

神学校に入学する以前から私には一つの口癖がありました。

それは、「どこにでも転がるとるような、こんな名もなき石ころを誰が拾ってくれるやろ」という言葉です。私は生まれた時からずっと同じ教会の中におり、外に出たことも殆どありませんでした。無名の私が神学生になったところで誰も私を知らないし、自分で自分を売り込んでいくなんて事も性格的に出来ません。私に出来ることは「神様、私を用いてください。」と祈ることだけでした。

すると祈りが聞き入れられました。先生や先輩、連盟の牧師達が声をかけて下さり、北海道、東京、静岡、名古屋、北九州、大分、鹿児島…と最初の半年だけでも奉仕のために色々な場所に行かせていただいたのです。多くの方々との出会いに恵まれ、貴重な経験もたくさんさせていただきました。私を拾ってくださるのは主なる神様なのだ実感いたしました。

また、主によって徹底的に養われるという事も体験させられています。現在アルバイトをしていないので1円も自分で稼げていない状態なのですが、必要は全て満たされています。連盟の奨学金や教会からのサポート、また個人的に「神様と約束したから」と経済面を支えて下さる方々が与えられ、教科書や辞典、様々な本なども牧師達が譲ってくださいました。日々の糧は寮の食事をはじめ、毎週食事に招いてくださる方や、毎週日曜の朝夕の食事を作って持ってきてくださる方、大量に食品を持ってきてくださる方が身近に与えられています。頂く恵みがあまりにも多いので、寮で分かち合わせていただく事もありました。

これまでも人から祈られ支えられていたとは思いますが、今ほど神の家族の祈りや愛を肌を感じたことはありませんでした。多くの兄弟姉妹たちの深い祈りが主にささげられ、主がその祈りを聞き、日々生きて働いてくださっています。

どこにでも転がっている名もなき小さな石ころのような私も主に拾われ、霊肉とも徹底的に主により養われています。この先どこに遠藤光子の需要があるのか分かりませんが、主のご栄光のために用いていただくに相応しく造り変えられることを引き続き祈ります。感謝しつつ。

《課題の応答と恵み》

研修教会：福岡ベタニヤ村教会

推薦教会：田辺キリスト教会

神学部神学科3年：紺田 剛孝



私には、この春から神学生としての生活するにあたり、推薦教会と研修教会の両教会より下記と同じ課題が与えられていました。「課題:献身者として、他学部生とも交流を持つこと。これにより、眼前の人に対する伝道のみならずキリスト者、また献身者は、ノンクリスチャンからどの様に見られるかを学ぶこと。」

親子程の年齢差がある同級生、見習いとはいえ世間では付き合いを躊躇される宗教者がいかに付き合えるだろうか。私は、この課題に応えるため神学の学びの傍ら、以前に少し嗜んだことのあるコントラバスの奏者として、西南学院大学管弦楽団に入団してみました。

そこには、課題の応答以上の恵みがたくさんありました。

- ① 1番多い質問「どうして牧師になろうと思ったの。」に応えるために半期だけで10~20回にわたる献身の証をノンクリスチャンにできたこと。
- ② 2番目に多い質問「牧師と神父の違いって何?」、「お肉って食べていいの?」といった今更聞けない基本的な質問に答える対象者となり得たこと。
- ③ 3番目に多い質問「牧師って大学で勉強してなるものなの?」。中々に手厳しいですが、自分はどの様な人間かということを示し示す、良い意味でも悪い意味でも心に留め置き続けなければならない質問だと感じました。

また、これだけではなく、管弦楽団有志による複数の教会での演奏奉仕は教会が町を受け入れるという視点もあるのだなという実感のある学び、そして更には、震災ボランティア活動から繋がり他学部教授の地元商店街活性化事業への参加予定も立ちました。「町の牧師となれ」との召命を持つ私にとって、この様な「町に受け入れられ、また受け入れる」日々は神学生として学ぶことが多く、研修教会であるベタニヤ村教会の皆様にも助けられながら毎日を過ごしております。1日でも早く皆様に仕える町の牧師となるべく、これからも日々切磋琢磨してまいります。

《溢れる主の恵み》

研修教会：博多キリスト教会 推薦教会：緑の牧場キリスト教会
神学部神学科3年：酒井 信



ハレルヤ！主の御名を賛美します。

西南神学部へ入学してから最初の年が終わろうとしています。振り返ってみると、神様から多くの恵みを頂いた素晴らしい1年であったと感じています。

西南神学部では、これまで学んだ神学とはまた違った角度から考える機会を与えられています。特に”キリスト教の幅広さ”を教えられた1年でした。キリスト者それぞれに神様に対して持つイメージが異なるように、神学的立場によっても考えは異なる。しかしどの神学も私に新しい見識を与えてくれています。神学の世界における多様性と、キリスト教における広い視野を学ばされています。

また、出会いにおいても恵みの多い一年でした。今年一緒に入学した仲間には、腹を割って話ができる人、助言を与えてくれる人、共に賛美し祈り合える人達が与えられました。また、研修神学生として迎えて下さった博多キリスト教会の皆様も、私達夫婦を愛し支えて下さっています。このような出会いの中で、私という器が神様によって変えられていることに感謝しています。

また、ミニストリーにおいても多くの恵みが与えられました。福岡の地に来てから、同年代の兄弟姉妹と伝道集会の働きをさせて頂いています。この働きを通して、バプテスマへ導かれる人も与えられました。祈りの中で神様が働かれていることを目の当たりにすることができ、これまで以上に神様に対する感謝と信頼が増し加えられています。

神学校に来る際、様々なビジョンを抱えて福岡に来ました。あるものは叶えられましたが、あるものは閉ざされました。不思議なことに神様の御心に沿った祈りは想像以上の結果が与えられ、反対に神様の御心とは違う祈りは全く聞かれませんでした。しかし、それが最善であったと思います。神学生としてのこの時、人生の主権者が自分ではなく、神様であることを深く教えられています。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」(詩篇 37:5)

これからも主である神様を信じ、歩んでまいります。

《信頼》

研修教会：福岡城西キリスト教会 推薦教会：福岡西部バプテスト教会
神学部神学科3年：永山 辰原



昨年の母教会での神学校推薦決議の臨時総会の際、自身の牧師像について聞かれました。私はその際、信徒の皆さんから“信頼”される牧師になりたいと答えました。至極当たり前のことですが、“信頼”というのは牧師にとって極めて重要であり、しかし同時にそう簡単なことではないと思ったからです。

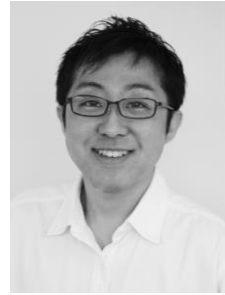
牧師に限らず、どのような職業においても、人からの信頼は欠かせません。私は以前営業の仕事をしておりましたが、クライアントからの信頼、職場の同僚、上司からの信頼なしでは仕事を進めることはほぼ不可能でした。人間は一人では生きていけず、他者から信頼されるということ抜きでは本来的な生き方はできないということは今更強調する必要のないことかもしれません。では、牧会における信頼は、ただ単にそのような“信頼”を意味するのか。この“信頼”ということの一つのテーマに、本年度4月神学部に入學しました。

入學して約半年が過ぎ、改めて思われるのは、学部、研修教会、寮生活どの面においても、他者からの信頼を得ることは、他者との積極的なコミュニケーションから始まるということです。研修教会においては、信徒の皆さんとの、学部、寮においては同僚とのコミュニケーションです。現時点で私自身が必ずしもそれを完璧にできているとは思いませんが、ひとたびコミュニケーション、関係性が作られると、思想の違い、波長の違いなどが見えてきて、関係性を続けていくこと自体に労力が必要になってくるのを感じます。それは、以前営業の仕事をしていた時に感じていたものでした。その関係性から背を向けず自らを点検していく、あるいは、問題や課題に対してその関係性の中で解決しようとする同僚の姿などを見て、まさにそのプロセスにこそ私たちが牧会者になる上で必要なことが詰まっているのではないかと思われるのです。

しかし、営業の仕事をしていた時と決定的に違うことも同時に感じます。それは、イエス様の十字架の事実が私たちを“関係”させるのだということです。他者への信頼を得る一連のプロセスは、イエス様の十字架があつて初めて成されることを忘れてはならないのだと思われます。私たちがやっているのは処世術ではない、そのことを胸に引き続き学びを続けていきたいと思ひます。

《復活の朝》

研修教会：長住バプテスト教会 推薦教会：大井バプテスト教会
神学部神学科3年：平野 健治



ある日の午前3時、新約聖書概論の授業で紹介された一冊の本がきっかけで、神学寮の何人かの仲間と「イエス・キリストの復活」について語り合っていました。紹介されたのは大貫隆編著『イエス・キリストの復活—現代のアンソロジー』という本です。その本によって私は、神学者たちの間でも復活という出来事理解に大きな違いがあるということを知りました。

例えばブルトマンは“復活は史的な出来事ではなく、十字架の有意義性の表現である”と理解します。カール・バルトは“聖書の関心は復活の事実や経過ではなく、復活が神の行為だということである。そして十字架とは独立した出来事である”と理解します。ゲルト・タイセンは“復活日やパウロの経験は幻視体験であり、その幻視は当事者にとっては体験として真正なものであった”と理解します。青野太潮先生は“イエスが読者の心の中に生きることが復活であり、福音書の再読の促しである”とおっしゃっています。私はジェームズ・D. G. ダンの“復活という言葉が隠喩として使ったのであり、それ以外では表現できない何かを指し示している”という理解が気に入っています。それぞれの神学生が、どのように復活を理解するのか、お互いの復活理解の共通点と違いを熱く語り合いました。

もしかすると2000年前の使徒たちも同じだったのでしょうか。イエスが十字架にかけられ、復活したと聞いた後、弟子たちは何が起こったのか分からずにいました。私たちのように集まり、語り合ったのでしょうか。墓が空だったという者、見なければ信じないという者、多くの違いを持った者が集められました。そして弟子たちが集まった場所、まさにその場所に復活のイエスは現れたのです。

あの日の午前3時、神学寮にも復活のイエスはいたのでしょうか。少なくともそこには生きた交わり、信仰告白、違いとそれを乗り越える力がありました。

聖書によればイエスは復活の後、弟子の前に現れ「全世界に行って、すべての造られたものに福音を述べ伝えなさい」と語られ、弟子たちを世界へと派遣されてゆきます。神学生も同じでしょう。集い、語り合う場所から派遣されてゆく者たちなのです。神学生であるこの時を、集い、語り合う者として、歩んでゆきたいと願っています。そのような時が連盟諸教会の方々の祈りと支えによって与えられていることを感謝いたします。

《史的イエスから学んだこと》

研修教会：西戸崎キリスト教会

推薦教会：盛岡バプテスト教会

選科3年：吉田 尚志



マタイによる福音書20章1節-16節 から、卒業論文<史的イエスのメシア意識―「葡萄園の労働者」の譬に見られる「主人」の振舞いからの考察>に取り組んでいる。マタイ福音書を編纂した教団組織に伝承された“特殊資料”をもとに、福音書記者によって編集されたと言われているこの箇所。1節aと16節は、福音書記者マタイの付加である可能性が高いと言われており、それはつまり、1節b-15節が実際に史的イエスの語った譬であることの蓋然性の高さを示している。

ぶどう園の主人は、夜明けとともに雇った労働者たちと、僅か一時間しか働いていない労働者たちに同等の報酬一デナリオンを渡した。一時間しか働いていない労働者たちとは、誰からも雇われず、ぶどう園の主人と出会うまでの長い一日の間、市場でずっと立ちつくしていた者たちだった。彼らの心に去来していたものとは何であったか。役立たずとみなされ、必要ないと宣告され、飢えに絶えながら、孤独や悲しさ、惨めさに押しつぶされていたのではなかったか。そんな“価値なしとされた者たち”を、ぶどう園の主人は自ら足を運んで招き、雇い、他の者たちと何一つ変わらない同等の報酬一デナリオンを手渡したのである。私には、このぶどう園の主人の振舞いが、方々村や町を巡り歩き、神の愛を伝えて廻ったイエスさまの姿と重なるのだ。

イエスさまは、打ちひしがれ、絶望の淵に立たされる一人ひとりのもとに出掛けていき、その全人格的存在を癒し、慰め、生きる希望を与えられた。社会の中で見向きもされない人々のもとに行き、一デナリオンを、人間の常識を乗り越えた“神の恵み”を与えて、神と共に生きる希望の人生へと派遣されたのである。無論、イエスさまとの出会いは、それとはまったく正反対の立場である時の権力者や支配者層にも、他の様々な状況に生きる人々にも訪れた。そう、本当に一人ひとりに神さまの愛が同等に差し出されたのだ。この中でイエスさまは、人が“幸い”であるということが何かを出会う一人ひとりに伝えた。それは“人の力によって掴み得る現実”を乗り越える、“神が等しく一人ひとりを愛する真実”があるということ。そしてそのことは、今を生きる私たち、世界の一人ひとりに、なお語られている。

《こんなに多くを担ったと?!》

研修教会：バプテスト野方キリスト教会

推薦教会：バプテスト野方キリスト教会

選科2年：永松 博



2015年11月3日(火)以降、野方教会は36年間の歩みの中で、初めて牧師不在の時を体験しています。またわたしは、推薦教会員かつ研修神学生として、教会の働きのほんの一端を担わせていただいています。そのような中で、今わたしが最も実感していることは「牧師も教会の皆さんも、こんなに多くを担ったと?!」という衝撃です。それは、目に見える実質的な奉仕や働きだけではなく、普段は直接目に見えない部分でも、教会のために心砕き、主の御心を求めて、一つひとつの働きを担ってこられた方々の姿に幾度も気付かされたのです。わたしは、このような多くの方々のお働きによって守られていた小さき者でした。

わたしは、イザヤ書53章の苦難の僕の姿を思い起こします。

「彼が担ったのはわたしたちの病/彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに/わたしたちは思っていた/神の手にかかり、打たれたから/彼は苦しんでいるのだ、と。/彼が刺し貫かれたのは/わたしたちの背きのためであり/彼が打ち砕かれたのは/わたしたちの咎のためであった。/彼の受けた懲らしめによって/わたしたちに平和があたえられ/彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」

イエス・キリストこそ、苦難の僕として多くを担われた方であり、わたしは、その主イエスによって守られ、生かされている小さき者です。

ですが、わたしはその恵みのトンデモナさを、普段どれほど実感できているのだろうかと思うのです。主イエスの愛を完全に理解することはできないのかもしれない。しかし、差し出された盃を受け取り続け、少しでも「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされる」者とさせて下さいと願ってやみません。

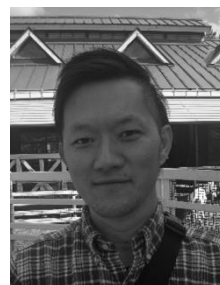
さて、来年度はいよいよ最終学年となります。共に使命を担い合う、愛する妻(九実子)と、5月5日誕生予定の新しい命と共に、精一杯主に仕えてまいります。この先、わが家に用意してくださる主のご計画に期待いたします。

最後になりましたが、神学生を覚えて下さる皆様に心から感謝申し上げます。皆様の日々の中に、主の平安が豊かにありますようにお祈りしています。在主

《神学のよろこび》

研修教会：鳥飼バプテスト教会 推薦教会：富山小泉町キリスト教会

選科2年：宮田 祐亮



ハレルヤ！母教会、研修教会また全国諸教会の皆さまのお祈り、お支えによって、恵まれた環境の中で何ん自由なく神学生としての学びと、奉仕に専念できるこの時を心から感謝いたします。愛する妻と2人の子供たちと共に毎朝の寮礼拝から始まる一日一日を過ごしています。

神学生としてよく「神学校での学びはどうですか？」と聞かれます。しかしこれは難しい質問です。決して一言では語れない大きな葛藤と挫折がそこにあるからです。肝心なその学びはといえば入学当初から何度も大きな壁にぶつかりながらも必死に食らいついていた苦しい時が続いていました。もしかするとそれは反対に自分の壁を壊されないように必死で防御していたのかもしれませんが。しかし驚くことに今年度は大きな変化が与えられました。ある本の中に『神学の仕事の一つは、私たちが批判的に言葉を使うように促すこと』とありました。“批判的”神学校での学びの中で何度この言葉に出会ったことでしょうか。そしてその都度悩み、考えさせられてきました。西南での学びでは、大きな打ち砕かれに何度も襲われます。今までの自分が形成してきた信仰、聖書の読み方をあえて批判的に学び、時には自らのその献身の召命さえも批判的に吟味しなければなりません。私は無意識の内にも自分自身の信仰を絶対視し、打ち砕かれることを拒んでいたように思います。学問的、批判的に学びをする中で時には聖書がただの文献資料のように見え、苦しむことも多々ありました。その他にも神学を学ぶことは多くの葛藤を覚ええます。しかし、その都度神は必ず私を立て直して下さいました。今はむしろこの過程を通らされるのが献身者としての大きな訓練であったと確信しています。今、少し前までは考えられない事ですが、神学の学びがゆるされていること、神学できるよろこびを心から感じています。私たちの神学の学びは決して単なる知識を増し加えるだけで終わるものではありません。私たちが信じる神は生きておられます。同様に神学もまた生きています。神学のよろこびを知ってからはすべてが変えられました。聖書を読む時、説教を聞く時、その姿勢が変えられるのです。そこから生きた神の御声を聞こうとする自分がいました。神学のよろこび、それはなによりも自分自身が神によって変えられるよろこびです。このような欠けた者を召して下さいました主に忠実に従い歩んでまいります。

《造り変えられていく者へ》

研修教会：早良キリスト教会

推薦教会：札幌バプテスト教会

選科2年：横濱 峰二子



昨年の4月に西南学院大学に入学し、1年半が過ぎました。その間、私は主から砕かれ続けられた日々でした。昨年の前期は、何も分からない情けない者であると自分を責め、自分の立ち位置を見失い「自分は今ここで、何をしているのかしら？」と、呆然と立ちすくんでいたように思います。後期に入り、授業、環境に慣れつつ、神さまから与えられた試練を一步ずつ歩む中で、新たな自分と何とか向かい合おうとするようになりました。

そんな折、9月に超教派による“第50回九州アシュラム”の研修会に参加させて頂きました。会場は“むなかた祈りの森・カトリック福岡黙想の家”でした。そこには街外れの森に囲まれた小高い丘に、教会と閑静な佇まいの黙想用の個室が連なる宿泊施設が建っておりました。ここで24時間連鎖祈禱、黙想、聖書の学び、そして、祈りと交わりの時が与えられました。

この黙想のとき、いつもの祈りでは示されなかった主の導きを与えられました。そこで「自分」と「他者」との関係を、「主」と「自分」との関係に変えられていったのです。まさに主との距離が縮められた思いが致しました。研修の期間中、私は「今まで自分は、主から与えられた御霊を悲しませて過ごしていなかったか？」と問われ続けていました。そして、ここで与えられた思いは、「主よ、わたしを憐れんでください」と、絶えず祈り求めることでした。また、何かをなす時、自分の生まれながらの力、そして経験からではなく、私を通して主が働かれていることを知る事でもありました。改めて、自分自身が日々御霊によって造り変えられて、新たに主との関係が深められた思いがいたしました。

このアシュラムの会から戻って来て、他の方々からの相談に耳を傾ける時が、多くなったように思われます。そのような場合、相談者の心の思いに寄り添いながら、話を聞くようにしております。いつも主が伴って下さることに信頼し、「主よ、わたしを憐れんでください」と祈りながら。それは「自分」と「主」との関係が築き上げられると、次に自然と「人」と「人」との関係に導かれて行くように思われます。主イエスは人と人とのつながりに対して向けられた神の愛を表して言われます。「互いに愛し合いなさい。」と…。これからも主との関係、人との関係において主の憐れみのうちに日々造り変えられていきたいと願っております。

《支えられて、助けられて》

研修教会：福岡国際キリスト教会 推薦教会：新潟主の港キリスト教会

選科1年：加山 献



主の御名を賛美いたします。いつも私たち神学生を覚えて、祈ってくださる全国諸教会の皆様我心から感謝いたします。様々な面で整えられた環境の中、毎日の学びが新鮮でとても充実しています。現在、受講している講義で特に興味が引き立てられる科目は、新約釈義、旧約釈義、宣教学、そして宗教心理学です。釈義の講義ではギリシア語とヘブライ語に触れる機会があります。言語は難しく、私の理解力はまだまだ未熟であると言わざるを得ませんが、聖書の釈義を通して自分なりに新しい発見が多くあるように思います。宣教学ではキリスト教における”宣教(ミッション)”の歴史と概念を学んでいます。18世紀にイギリスからインドへ渡った宣教師、ウィリアム・ケアリの宣教の方法からは特に感銘を受けました。また宗教心理学では、人間の心や感情、カウンセリングなどについて教えていただいています。

今までゆっくり考えることのなかったような事柄を、時間をかけて思い巡らすことのできる場所、それが神学部なのだと感じています。あらためて、日々与えられている恵みの大きさに感謝いたします。

一方、寮の生活では、今年度は寮長としての役を任せられました。当初は、リーダーシップをもって組織を運営することに慣れていない私には荷が重いと感じられましたが、これも訓練の一環であろう引き受けさせていただきました。やってみると、やはり何かは抜けていたり、失敗だらけの私ですが、寮の仲間に支えられ、助けられながら、なんとか働きを続けられました。何事も一人でやるのではなく、仲間に相談しながら、一緒に働きを進めることができたことは良い経験でした。

研修教会としてお世話になっている福岡国際教会、出身教会である新潟主の港教会、そして全国諸教会の皆様我心から感謝いたします。皆様の上に神様の祝福が、益々豊かに注がれますように、お祈り申し上げます。

5. 編集後記

神学生と神学部を覚えてくださる全国諸教会・伝道所の皆様へ。

主の御名を心から賛美致します。

今年度も対外委員会は「一人でも多くの方に、神学生の顔と名前を知っていただきたい」との思いで、神学部と全国諸教会伝道所の橋渡し役としての働きをさせていただきました。

わたしたち神学生は、できることならば皆さんと直接お会いし、主の豊かな御業について分かち合うことができればと願っておりますが、物理的な距離や時間の制約、そのほか多くの理由によりすべては叶わぬという現状があります。しかし、毎年発行される本誌を通じて、皆様の熱い祈りとお支えが、この西南学院大学神学部において用いられ、わたしたち神学生が、主の綿密なご計画によって、砕かれ、再構築されていることを少しでも分かち合うことができればと思っております。

弱く、小さな者たちですが、これからも主が用意しておられる道を歩んでいきたいと願っております。どうぞ、これからも神学部と神学生のことを皆様の祈りに覚えて下されば幸いです。私たちも、福岡の地から、皆様を覚えてお祈りしております。

主に在りて

2015年度 西南学院大学神学部学生会対外委員会一同

『道』2015（年刊・第40号）

発行日	2016年2月1日
発行者	西南学院大学神学部学生会
編集	神学部学生会対外委員会
	河端真理子 國分美生
	福久織江 酒井朋宏
	永松 博 平野健治
	(学年順)